

平安期散文資料における無助詞名詞の統語的機能

—中間報告—

山 田 昌 裕

Syntactic Functions of Noun Phrase without Particles in the Prose of the Heian Period — An Interim Report —

Masahiro Yamada

要旨

本稿で扱う無助詞名詞とは、格助詞、副助詞、係助詞などが下接しない名詞のことである。平安期の無助詞名詞が情報伝達上どのような統語的成分として振る舞い、どのようなシステムで運用されていたのかを明らかにすることが目的である。対象とする無助詞名詞は、国立国語研究所のコーパス検索アプリケーション、中納言「歴史コーパス」によった。平安期に見られる無助詞名詞は約24000例にのぼるが、今回はそのうち約8000例を対象とした中間報告である。

無助詞名詞の振る舞いは、これまで数値で示されたことはなかったが、今回の調査で数値によって無助詞名詞の振る舞いを明らかにしたことは大きな成果であると言える。先行研究によれば、無助詞名詞には多様な格成分が見られることが指摘されていたが、今回の調査により、そのほとんどがガ格またはヲ格であることが数値で明らかとなった。無助詞無生名詞は、属性の主体や情意の対象（形容詞文の主語）、存在主体や変化主体（非対格自動詞文の主語）、他動詞文の対象となっており、ひと言でまとめれば、非行為者として振る舞っていると言える。一方で、無助詞有生名詞の多くは意志性述語（他動詞、非能格自動詞）と呼応して行為者となるが、対象となる場合も少なからず見られた。

今後の課題としては、今回の調査が無助詞名詞全体の3分の1に基づくも

のであったため、すべての無助詞名詞を対象として改めて考察する必要があること、また構文的環境における無助詞名詞の振る舞いを明らかにすることがあげられた。

キーワード：無助詞名詞、統語的機能、有生名詞、無生名詞

Key words : Noun Phrase without Particles, Syntactic Functions, An Animate Noun, An Inanimate Noun

1. はじめに

本稿で扱う無助詞名詞とは、格助詞、副助詞、係助詞などが下接しない名詞のことである。平安期の無助詞名詞が情報伝達上どのような統語的成分として振る舞い、どのようなシステムで運用されていたのかを明らかにすることが目的である。

平安期の無助詞名詞の統語的研究については、その多くが動作の対象となる無助詞名詞と「ヲ」標示の選択に関わる研究であり、無助詞名詞の全体像は明らかになっていない。小田（1997）では、源氏物語における無助詞の名詞に現れ得る成分として、主格、ヲ格、二格、ニテ格、ト格、接続句的に解釈されるもの、格関係を有さない提題などをあげ、「これだけ多様であってみれば、無助詞の名詞は、特定の格に係わらず、構文的職能を明示しない表現として、単に、文中に放り出されたものと考えられることができるだろう」と述べる。しかし、無助詞名詞の具体的な数値は示されておらず、実態としての全体像を捉えているとまでは言えない。また相当数の無助詞名詞の存在が認められる中で、もし無助詞名詞が「構文的職能を明示」せず、「単に、文中に放り出されたもの」であるとしたら、どのようにして文脈が理解されていたのか疑問である。

高山（2014）は、『源氏物語』の一部を分析対象として、述語との関わりから無助詞名詞における主格、対格について考察している。しかし動詞述語だけを扱っており、また無助詞名詞主語と「ガ」「ノ」の分布や無助詞目的語と「ヲ」の分布などに焦点が当てられ、無助詞名詞そのものの統語的運用に焦点を当てた研究ではない。

金（2016）では連体節内の主語表示において、無助詞名詞、「ガ」、「ノ」

がどのように使い分けられているのか、以下のように言及している。

無助詞は節の内部の小さい構造の主語を表示する形態で、「の」は節の構造が拡張されている時の主語を表示する形態である。「が」は「の」と無助詞の中間に位置する。

ただし、連体節におけるガ格の無助詞名詞の振る舞いに関する研究であり、やはり無助詞名詞の全体像には迫っていない。

高山（2014）、金（2016）はいずれも統語的な役割を担う無助詞名詞とそれに対応する助詞が、どのような条件下で使い分けられているのかという観点からの研究であり、格助詞によって統語的役割が表示されない無助詞名詞がどのようなシステムで運用されていたのか、という観点からの研究ではない。そこで本稿では無助詞名詞そのものに焦点を当て、実態を明らかにしたうえで、どのようなシステムで運用されていたのかについて考察してみたい。以下、2節では、分析対象の抽出法について述べ、3節では、無助詞名詞の全体像を数値で示したうえで、統語的分析と考察をする。4節では、まとめと今後の課題を示す。

2. 分析対象と分析の観点

2.1 分析対象の絞り込み

調査対象とするデータは、国立国語研究所のコーパス検索アプリケーション、中納言「歴史コーパス」によって、平安期の無助詞名詞句を抽出し、その中から韻文における無助詞名詞を取り除き、さらに以下のa～gを除いたものである。その結果、平安期に見られる無助詞名詞は約24000例にのぼるが、今回の報告はそのうち約8000例を対象とした中間報告である。

「歴史コーパス」によって抽出した無助詞名詞の中には、単なる名詞の羅列となっている場合や、格助詞が承接することなく副詞的に使われている場合、命令文における呼びかけ、慣用句と思われるものなど、様々な成分が見られる。今回の調査では、無助詞名詞がどのように統語的成分として分布しているのかを明らかにしたいので、現代日本語の観点からとはなるが、副詞的に用いられている成分（a、b）、格助詞の付与が不可の成分（c、d、e）、格助詞の付与が可能かどうか判断できない成分（f、g）を除外した。f、

g に関しては、無助詞名詞の統語的振る舞いに関係する例であるが、これを除外することによって分析結果に影響を及ぼすものではない。

- a. 時名詞（朝夕、日ぐらし、ひとひ、をり、昔、など）

君たちは、朝夕霧のはるる間もなく、思し嘆きつつながめたまふ

（『源氏物語・椎本』 p. 188）

- b. 場所名詞（南、あたりあたり、一町、ひとかは、など）

小一条の南、勘解由小路には、石畳をぞせられたりしが、まだはべるぞかし

（『大鏡』 p. 94）

- c. 名詞の並列

「虫の名をなむつけたまひたりける。けらを、ひきまろ、いなかたち、いなごまろ、あまびこなんどつけて、召し使ひたまひける」

（『堤中納言物語』 p. 412）

- d. 慣用句と思われるもの（こと果つ、前近く、面目あり（なし）、など）

おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、ことはつるまに、宰相の君にいひあはせて、隠れなむとするに

（『紫式部日記』 p. 165）

- e. 呼称、呼びかけ

「おとど必ず立ち寄りたまへ。やがて御供に、そこにもものしたまへ」
とのたまへば

（『落窪物語』 p. 232）

- f. 数量詞（ひとつ、おのおの、みな、あまた……）

以下に示す例のように、「（名詞）ひとつを」「（名詞）をひとつ」の両形式が見られ、「御衣ひとつ」の場合、「御衣ひとつを」なのか「御衣をひとつ」なのか判断不能である。このような数量詞と思われる成分は除く。

蓑ひとつを着たる法師

（『大和物語』 p. 409）

生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり（『源氏物語・空蟬』 p. 124）

「この御寺になむ侍る。いと寒きに、御衣（ヲ？）ひとつ（ヲ？）しばし貸したまへ」とて

（『大和物語』 p. 409）

- g. 格助詞を補えない成分

「さるべき僧、誰かとまりたる」などのたまふ御気色、心強く思しなすべかめれど、御顔の色もあらぬさまに、いみじくたへかね御涙のとまらぬを、ことわりに悲しく見たてまつりたまふ。

（『源氏物語・御法』 p. 507）

2.2 分析の観点

先行研究では名詞の有生性、無生性という観点からの分析はなかったが、高山（2014）、金（2016）などの研究において一部言及が見られ、その有用性が理解される。また言語類型的には古代日本語が活格型言語であるとの指摘もあり、分析をする上で、名詞の有生性、無生性という観点は必要であると思われる。

また述部に関しても、言語類型的な分析に耐えられるよう、他動詞述語、非能格自動詞述語、非対格自動詞述語、形容詞述語、名詞述語という分類で分析を試みたい。その他として、複文、サ変動詞述語、受動表現、述語確定不可を立てる。

3. 結果と分析

3.1 結果

【表】は、今回本稿で対象とする無助詞名詞を2.2で言及した観点から分類したものである。

述語 \ 格関係		ガ	ヲ	ガ・ヲ	ニ	デ	ガ・ニ	ニヲヨリ	ト	ガ・デ	ニ・ヲ	合計
無生名詞	非対格自動詞	2230		1	8	4	5					2248
	形容詞	2157		16	13		2					2188
	名詞	85										85
	他動詞	4	1798		7	1			2			1812
	非能格自動詞	68	31		5	2		6			1	113
	複文	32										32
	サ変動詞	4	70		1							75
	受動表現	3	7									10
	述語確定不可			192		2				1		195
小計		4583	1906	209	34	9	7	6	2	1	1	6758
有生名詞	非対格自動詞	148					2					150
	形容詞	35			1							36
	名詞	20										20
	他動詞	375	84		2				1			462
	非能格自動詞	192				2						194
	複文	370										370
	サ変動詞	8										8
	受動表現	3										3
	述語確定不可		3	1			1					5
小計		1151	87	1	3	2	3		1		1	1248
総計		5734	1993	210	37	11	10	6	3	1	1	8006

表中、格関係とした「ガ」や「ヲ」は、現代日本語の一般的用法として格助詞を補うとすれば「ガ」や「ヲ」などが補えるという内省に基づくものである。また歴史コーパスによっても実際にどのような格助詞が標示されているのかを確認した上で分類を立てたものである。「ガ・ヲ」「ガ・ニ」など複数の格助詞が示されているものは、いずれの格助詞でも使用可能であることを示す。「複文」に分類したものは、無助詞名詞が複数の述語成分に関係していると思われるものである。

【非対格自動詞述語】

- ① さればよと思しあはせて、いよいよあはれφ (ガ) まさりぬ
(『源氏物語・夕顔』 p. 186)
- ② 「あなにく。かかることφ (ニ) 口馴れたまひにけりな
(『源氏物語・紅葉賀』 p. 331)
- ③ 「聖だちたる御ためには、かかるしもこそ心φ (ガ・ニ) とまらぬもよほしならめ」
(『源氏物語・橋姫』 p. 132)

【形容詞述語】

- ④ 命婦、かしこにまで着きて、門引き入るるより、けはひφ (ガ) あはれなり
(『源氏物語・薄雲』 p. 433)
- ⑤ まづ、母のありさまφ (ガ・ヲ) いと問はまほしく
(『源氏物語・夢浮橋』 p. 388)

【名詞述語】

- ⑥ 賀茂の臨時祭 はじまることφ (ガ) この御時よりなり (『大鏡』 p. 32)
- ⑦ 文台のもとに寄りつつ置くほどの気色は、おのおのφ (ガ) したり顔なりけれど
(『源氏物語・宿木』 p. 484)

【他動詞述語】

- ⑧ 聞こえわづらひて、あこぎφ (ガ) 返事φ (ヲ) 書く。
(『落窪物語』 p. 48)
- ⑨ 我、言ひつることφ (デ) (落窪が) いかに恥づかしと思ふらむといとほし
(『落窪物語』 p. 87)
- ⑩ 「ここに使ふ童、おほぞうのかけろふ、海の水のあらそφ (ト) いふ、二人の童べに賜へ」
(『堤中納言物語』 p. 507)

【非能格自動詞述語】

- ⑪ 今し、かもめφ (ガ) 群れゐて、遊ぶところあり (『土佐日記』 p. 46)
- ⑫ いみじう苦しげにおぼしたりければ、片時御かたはらφ (ニ・ヲ・ヨリ) 離れまゐらせず、ただ、われ、乳母などのやうに添ひ臥しまゐらせて泣く (『讃岐典侍日記』 p. 397)
- ⑬ またの年の秋、御ぐしおろしたまひて、ところどころφ (ニ・ヲ) 山ぶみしたまひて行ひたまひけり。 (『大和物語』 p. 254)

【複文】 * 無助詞名詞が統語的に複数の述語に係っていると見なせるもの

- ⑭ 女御の御けはひφ (ガ) ねびにたれど、飽くまで用意あり、あてにらうたげなり (『源氏物語・花散里』 p. 156)
- ⑮ あこぎφ (ガ) 遣戸引き立てて、ここにありけりと見えたとまつらじと思ひて、急ぎて曹司に行きたれば、帯刀が文あり (『落窪物語』 p. 127)
- ⑯ 「いかで聞きしことぞや、大臣の外腹のむすめφ (ヲ) 尋ね出でてかしづきたまふなるとまねぶ人ありしは、まことにや」 (『源氏物語・常夏』 p. 224)
- ⑰ 「この翁まろφ (ヲ) 打ちてうじて、犬島へつかはせ、ただいま」と仰せらるれば (『枕草子』 p. 39)

【その他 (サ変動詞述語⑱、受動表現⑲⑳、述語確定不可㉑㉒)】

- ⑱ 額より上ごまに、さくりあげ、欠伸φ (ヲ) おのれよりうちして、寄り臥しぬる。 (『枕草子』 p. 60)
- ⑲ わが君φ (ガ) 孕まれおはしましたりし時より、故宮深く思し嘆くことありて (『源氏物語・薄雲』 p. 451)
- ⑳ 「天下の親にて、おのが家φ (ヲ) おし取らるる人もある (『落窪物語』 p. 227)
- ㉑ その世のことφ (ガ・ヲ) あはれに思しつづけらる¹⁾ (『源氏物語・御法』 p. 498)
- ㉒ 紅葉の蔭に入りぬるなごりφ (ガ・ヲ)、飽かず興ありと人々思したり (『源氏物語・若菜上』 p. 95)

3. 2 統語的分析

ここでは【表】に基づいて無助詞名詞の統語的分析を試みる。

a. 統語的成分の偏り

小田(1997)で言及されているとおり、確かに無助詞名詞には多様な統語的成分が見られるが、【表】の数値からは明らかにガ格とヲ格に偏っている様子がうかがえる。無助詞名詞8006例のうち、ガ格は5734例(71.6%)、ヲ格は1993例(24.9%)、計7727例(96.5%)となっており、原則として無助詞名詞はガ格かヲ格であると言ってよいであろう(さらにガ・ヲ格210例を加えると99.1%となる)。これまで無助詞名詞の全体像は不明であったが、ガ格ヲ格への偏りを数値で示せたことは大きな成果であると考ええる。

b. ガ格ヲ格における有生名詞と無生名詞の振る舞い

無助詞名詞はガ格かヲ格になることが明らかになったが、ここでは無助詞名詞の大部分を占めるガ格ヲ格における、有生名詞と無生名詞の特徴的な振る舞いについて指摘する。有生名詞は全体の1248例のうち、ガ格が1151例(92.2%)となっており、有生名詞はガ格に偏ると言える。一方、無生名詞は6758例のうち、ガ格が4583例(67.8%)、ヲ格が1906例(28.2%)となっており、ガ格が優勢ではあるものの、ヲ格も少なからず存在する。ヲ格の側から見れば、1993例のうち無生名詞ヲ格が1906例(95.6%)、有生名詞ヲ格が87例(4.4%)であり、有生名詞はヲ格になりにくいということがうかがえる。もちろん無生名詞の方が絶対数を有することも影響するが、無生名詞ガ格が4583例(79.9%)、有生名詞ガ格が1151例(20.1%)となっていることを鑑みれば、無助詞有生名詞はヲ格になりにくく、無助詞無生名詞がヲ格になりやすいということは一つの特徴と考えてよいであろう。

c. ガ格における有生名詞と無生名詞の特徴

無生名詞ガ格4583例のうち、非対格自動詞文がもっとも多く2230例(50.2%)であり、次に形容詞文が2157例(47.1%)で、合わせると4387例(95.7%)となる。無生名詞ガ格は非対格自動詞文、形容詞文の主語となっていると言える。一方で有生名詞ガ格781例のうち(複文の場合には統語的に対応する述語成分が複数あり、分類を確定できないのでここでは除くが、結果に影響を及ぼすことはない)、非対格自動詞文は148例(19.0%)、形容詞文は35例(4.5%)で、合わせて183例(23.4%)となっており、無生名詞ガ格とは対照的に低い数値を示す。有生名詞ガ格では、他動詞文375例

(48.0%) がもっとも多く、次に非能格自動詞文192例 (24.6%) が多い。有生名詞ガ格は他動詞文、非能格自動詞文の主語となる傾向があると言えそうである。ガ格における有生名詞無生名詞は、対応する述語に関してゆるい相補分布をなしていると考えられる。なぜこのような相違点が見られるのであろうか。

これは名詞の有生性、無生性に起因するものと考えられる。有生名詞は有生であることにより意志性を持ち、無生名詞は無生であることにより意志性を持たない。他動詞や非能格自動詞は意志を伴う行為であり、意志性を持つ主語と対応しやすい。一方で非対格自動詞は意志を伴わない動き、または状態であり、形容詞もまた状態性である。したがって意志性を持たない主語と対応しやすい²⁾。ガ格における有生名詞と無生名詞の振る舞いが、対応する述語においてある種の相補分布となっているのは、意志性の有無に起因するものと思われる。考えてみれば当たり前のことではあるが、ガ格における有生名詞と無生名詞の振る舞いを数値で示せたことは一つの成果であると考えられる。

d. ヲ格における有生名詞と無生名詞の振る舞い

aにおいて、無助詞有生名詞はヲ格になりにくく、無助詞無生名詞がヲ格になりにやすいと言及したが、ここでは他動詞文にしばって、有生名詞と無生名詞の振る舞いに関してさらに考察したい。他動詞文における無生名詞は1812例のうち、1798例 (99.2%) がヲ格であり、無助詞無生名詞は他動詞文において原則としてヲ格であると言ってよいであろう。一方で有生名詞の場合は462例のうち、375例 (81.2%) がガ格で、84例 (18.2%) がヲ格である。ガ格が優勢ではあるものの、少なからずヲ格の場合もあり、有生名詞がガ格として振る舞うのか、ヲ格として振る舞うのか、文脈理解において不都合となることが予想される。

しかし、実際には、以下に示すように、行為者が共起している例 (23～25)、命令表現や願望表現における使用例 (26～28)、敬語表現における使用例 (29 30)、有生名詞であっても階層が下に位置する例 (31 32) などが見られ³⁾、それらの条件によって情報伝達上、有生名詞でもヲ格になっているということが明確な例が多い。

【行為者が共起している例】

- ②③ むかし、大納言の、むすめ ϕ (ヲ) いとうつくしうてもちたまうたりけるを
(『大和物語』 p. 389)
- ②④ 客人は、弁のおもと ϕ (ヲ) 呼び出でたまひて
(『源氏物語・総角』 p. 241)
- ②⑤ 御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光 ϕ (ヲ) 召させて
(『源氏物語・夕顔』 p. 135)

【命令表現・願望表現における使用例】

- ②⑥ 「翁まろ、いづら。命婦のおとど ϕ (ヲ) 食へ」と言ふに
(『枕草子』 p. 39)
- ②⑦ 明日のほどに、清げならむ童、おとな ϕ (ヲ)、求め出でたまへ
(『落窪物語』 p. 143)
- ②⑧ 下襲は縫ひ出でて、袍折らむとて、「いかで、あこぎ ϕ (ヲ) 起こさむ」
とのたまへば
(『落窪物語』 p. 94)

【敬語表現における使用例】

- ②⑨ 貫之 ϕ (ヲ) 召し出でて、歌つかうまつらしめたまへり(『大鏡』 p. 414)
- ③⑩ 今宵、少輔の乳母、色ゆるさる。ただしきさまうちしたり。宮 ϕ (ヲ)
抱きたてまつれり。
(『紫式部日記』 p. 219)

【名詞の階層が下に位置する例】

- ③⑪ 月の明かきに屋形なき車のあひたる。また、さる車にあめ牛 ϕ (ヲ) かけたる。
(『枕草子』 p. 101)
- ③⑫ 駒 ϕ (ヲ) 並めてうち過ぎたまふにも心のみ動くに
(『源氏物語・霽標』 p. 307)

3.3 運用システムの考察

無助詞名詞には、確かに多様な格成分が見られるが、数値的にはかなりの偏りが見られた。「特定の格に係わらず、構文的職能を明示しない表現として、単に、文中に放り出されたもの」とした小田(1997)の指摘は妥当であるとは言いがたい。

無助詞名詞は、ほとんどがガ格またはヲ格であった(aより)。そして無助詞無生名詞は、属性の主体や情意の対象(形容詞文の主語)、存在主体や変化主体(非対格自動詞文の主語)、他動詞文の対象となる(c、dより)。

一言でいえば非行為者と考えてもよいであろう。無助詞有生名詞の多くは意志性述語（他動詞、非能格自動詞）と呼応して行為者となるが（cより）、対象となる場合も少なからず見られた（dより）。しかし、他動詞文において対象となる場合でも、文中の共起成分や名詞自身の語性によって行為者との識別は簡便に行われていたと思われる。

平安期には項に立つ名詞がガ格であることを表示する専用の格助詞は存在しない。裏を返せば、情報伝達上その助詞の存在は必要なかったということである。なぜなら名詞の有生性無生性によって、項に立つ名詞の役割、振る舞いが理解されていたからである。上記の考察をさらに簡潔にまとめると以下のように示せるであろう。

	ガ格行為者	ガ格非行為者	ヲ格対象
無助詞無生名詞	×	◎	
無助詞有生名詞	◎	○	△

4. まとめと今後の課題

本稿では、平安期の無助詞名詞が情報伝達上のような格成分として振る舞い、どのようなシステムで運用されていたのかについて考察した。

先行研究に指摘されていたとおり、無助詞名詞には多様な統語的成分が見られることは事実であったが、そのほとんどはガ格、ヲ格が占めているということを示したことは今回の調査の成果である。また名詞の有生性無生性によって情報伝達システムが運用されていることも示せたと考える。山田（2018）においても名詞の有生性無生性が格の表示に関わっていることが指摘されている。古典語研究において名詞の有生性無生性は、統語的研究における重要なファクターとして考慮すべきであろう。

今回の調査は、無助詞名詞全体の3分の1に基づくものであり、すべての無助詞名詞の分析結果より改めて統語的考察をする必要がある。また今回は構文的環境という観点からの分析は行っていない。構文的環境における無助詞名詞の振る舞いを明らかにすることは、無助詞名詞と「ガ」「ノ」「ヲ」標示の名詞との棲み分けに関する研究に資するものがあると思われる。今後の課題となるところである。

注

1) 以下の①②が示すとおり、「(名詞)の(形容詞連用形+オモウ)」や「(名詞)を(形容詞連用形+オモウ)」の両用が見られるため、この構文に類する場合は「(ガ・ヲ)」の可能性があると見なした。

① 「昨日の御気色のあさましうおほいたりしこそ、心憂きもののあはれなりしか」とのたまはせられたば (『和泉式部日記』 p. 63)

② 久しき御対面のとだえをめづらしく思ひて、御物語こまやかに聞こえたまふ (『源氏物語・御法』 p. 500)

2) 【表】によれば数的には少ないが、無生名詞が意志的動作の非能格自動詞文の主語となっている例が認められる。しかし、実際の文脈上では行為としてではなく、出現や状態変化を表しており、非能格自動詞は無生名詞を主語に持つことによって、非行為的述語として機能していると思われる。

① なほ懲りずまに、またもあだ名ゆ (ガ) 立ちぬべき御心のすさびなめり (『源氏物語・夕顔』 p. 191)

② 母君も、さこそひがみたまへれど、うつし心ゆ (ガ) 出でくる時は (『源氏物語・若菜上』 p. 122)

③ のどやかならで還らせたまふ響きにも、后は、なほ胸ゆ (ガ) うち騒ぎて (『源氏物語・少女』 p. 75)

3) ここでは角田 (2009) に示されている「シルバースティーンの名詞句階層」の図に従う (p. 41)。1 人称 > 2 人称 > 3 人称 > 固有名詞 (親族名詞) > 人間名詞 > 動物名詞 > 無生物名詞という階層が存在し、階層が高い方 (左の方) の名詞句は動作者になりやすく、階層が低い方 (右の方) の名詞句は動作の対象になりやすいという。

【参考文献】

- 小田 勝 (1997) 「源氏物語における無助詞の名詞」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』 33
- 金 銀珠 (2016) 「中古語の名詞修飾節における主語の表示—無助詞と「の」と「が」の相互関係—」『日本語の研究』 12-4
- 高山道代 (2014) 『平安期日本語の主体表現と客体表現』 ひつじ書房
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』 くろしお出版
- 山田昌裕 (2018) 「格助詞「ガ」の用法拡大の様相—ヲ格名詞 (対象) に下接する用法

を中心として一」『国語と国文学』95-1

【付記】

本研究は、JSPS科研費「平安期鎌倉期の日本語における無助詞名詞句の運用システム」課題番号17K02791の助成を受けたものです。